

【抄録】

インカ国家と地方社会の関係について-植民者集団ミトマクーナの実態に着目して-

村瀬正紘（東京大学）

1. 研究の目的と意義

本研究では、先スペイン期アンデスのインカ社会における、インカ国家と地方社会の関係について、ミトマクーナと呼ばれる植民者集団に着目して考察を行った。ミトマクーナはインカの国家的権力の下で強制的に移住させられた人々のことを指す。インカ帝国全土において、当時のアンデスの人口の 3 分の 1 にも及ぶ被支配民が、ミトマクーナとして移住させられ、また彼らの担った役割も政治、経済、軍事といったインカ社会の重要な諸側面に及んだ。ミトマクーナと彼らをめぐる制度を解明することは、インカ社会の政治経済的特質を明らかにするうえできわめて重要なテーマと捉えられてきたが、ミトマクーナが果たしていた具体的な役割や彼らの社会的な地位に関しては、未だに明らかになっていない部分が多い。とりわけ、インカにより徴発されたミトマクーナが、派遣先の共同体においてどのように位置付けられ、在地の住民とどのような関係を形成したか、という点については、ほとんど研究されてこなかった。したがって本研究では、16 世紀以降にスペイン語で作成された文字史料の分析を通じ、インカ国家によって派遣されたミトマクーナが、移住した先のアイユと結んだ関係について分析し、インカ社会で行われていた植民の実相について、史料分析による新たな視点からの考察を試みた。

2. 分析史料

本研究が主に分析の対象としたのは、植民地期アンデスにおいて実施された巡察および訴訟の記録史料である。アンデス地方はスペインにより征服されたのち、ペルー副王領として定められ、主に行政上の目的により各地の人口や社会の動向を調査する巡察 (visita) が実施された。そのうち 16 世紀に実施された巡察の記録には、先スペイン期におけるアンデス社会の様子を反映した記述がなされ、特に先スペイン期アンデスの最後の時代であるインカ社会への言及が多く見られる。他方、植民地期アンデスではインディオ同士あるいはインディオとスペイン人の間で行われた訴訟が行われており、そのうち土地の帰属を巡って争われた訴訟の記録からは、インカ社会における複数の主体（民族集団、ミトマクーナに属する個人）間の関係を読み取ることが可能である。

以上のような巡察と訴訟の記録がもつ性格を踏まえ、本研究では次に示す四点の史料を分析した（図1）。

- アンデス中央高地ワヌコにおいて1562年に実施された巡察の記録(Ortiz de Zúñiga, 1967[1562])。
- アンデス中央海岸キヴィにおいて土地の帰属をめぐりチャカリャ族とカンタ族の間で1550年より実施された訴訟の記録に関する、アンデス史研究者ロストウォロフスキの報告(Rostworowski de Diez Canseco, 1970[1967-8])。
- アンデス南高地の王領アバンカイにおいて土地の帰属をめぐりスペイン人とインディオの間で1575年に実施された訴訟の記録(Espinoza Soriano, 1973)。
- 現在のボリビアに位置する王領コチャバンバにおいて土地の帰属をめぐりスペイン人とインディオの間で1560年代に実施された訴訟を分析した、アンデス史研究者ワ



シュテルの研究(Wachtel, 1982)。

図1：分析に用いた史料にて扱われている地域

(Google Earth により発表者作成)

3. 分析結果・考察

ミトマクーナが移住した先の社会での実態について分析と考察を行った結果、ワヌコの巡察記録やキヴィの訴訟記録の分析では、派遣されたミトマクーナが、複数の独立したア

アイユからなる地域を組織し、地域社会の中で土着の民族集団と対等に位置付けられていたことを示した。それと同時に、ミトマクーナの共同体の内部においても、政治的なヒエラルキーの変化として、派遣される以前に彼らの間に存在した社会的地位の差が解消した可能性も考えられる。いっぽう、インカの王領があった地域の史料からは、在地の共同体と関係を持ったミトマクーナがいたことが分かり、そのうち現ボリビアのコチャバンバの事例では、インカのための耕作地の外部で、ミトマクーナが在地の共同体の方式に則って自身のために耕作をする例が確認された。これらの地域に見られた事例を通して、各地方社会に派遣されたミトマクーナの実態は、その派遣のされ方に応じて異なり、ミトマクーナが国家のための特別な役割を負って移住した地域では、彼らは独自のアイユを組織し、ミトマクーナという集団として在地のアイユと関係を持ったこと、また、インカの王領があった地域では、王権の有する土地が明確に定められていたがために、その外部におけるミトマクーナによる私的な土地所有が顕在化し、そこでは在地のアイユとの文化的な混淆が見られたことが考えられる。

結論として、ミトマクーナという社会集団にも地域や場合に応じてバリエーションがあり、彼らと派遣先のアイユとの関係にも地方ごとの差異があった。特に、王領と、そうでない地域とでは、ミトマクーナが在地の共同体と結んだ関係に大きな違いがあった。王領ではミトマクーナがインカの管轄外の地域で個人のレベルで在地の共同体と関わりを持っていたのに対し、王領でない地域では、ミトマクーナは集団としてのある種の結束力を発揮し、近隣のアイユと何らかの集団的な関係を持っていたことが示された。この点から、インカ国家と地方共同体の関係は、王権の影響が比較的弱い地域において、明瞭な形で立ち現れたと考えることができる。

4. 参考文献

Espinoza Soriano, Waldemar. “Las colonias de mitmas múltiples en Abancay, siglos XV y XVI.”

Revista del Museo Nacional 36, 1973: 225–99.

Ortiz de Zúñiga, Iñigo. Visita de las cuatro waranqa de los Chupachu. Visita de la provincia de León de Huánuco en 1562, tomo I. Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizán, Facultad de Letras y Educación, 1967[1562].

———. Visita de los yacha y mitmaquna Cuzqueños encomendados en Juan Sanchez Falcon.

Visita de la provincia de León de Huánuco en 1562, tomo II. Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizan, Facultad de Letras y Educación, 1972[1562].

Rostworowski de Diez Canseco, María. "Etnohistoria de un valle costeño durante el Tahuantinsuyu." *Revista Del Museo Nacional*, 35, 1970[1967-8]: 7–61.

Wachtel, Nathan. "The Mitimas of the Cochabamba Valley: The Colonization Policy of Huayna Capac." In George Allen Collier, Renato Rosaldo, and John D. Wirth (eds.), *The Inca and Aztec States, 1400-1800: Anthropology and History*, 199–235. New York: Academic Press, 1982.

【抄録】

アンデス形成期末期におけるペルー北部中央高地の地域間交流

佐藤優音（東京大学）

1. はじめに

本発表では、アンデス文明形成期（紀元前 3000-紀元後 1 年頃）の末期（前 250-後 1 年頃）における北部中央山地の地域間交流について、土器装飾の類似性の観点から議論する。

形成期末期は、形成期後期（前 800-前 250 年）のあいだアンデス広域に大きな影響力を持ったチャビン・デ・ワントル遺跡の活動が停止したことによって、各地域が新たな地域内・地域間関係を再構築する時期であった。砦が建設されるなどアンデス各地で地域内の統合が強まり地域外との緊張が高まった一方で（加藤・関編 1998: 262）、北部中央高地のワヌコ盆地では、盆地外の近隣地域とも土器の器形や装飾の面で類似した要素を共有するようになるなど、盆地外との対立ではなく交流を増加させるという傾向が確認されている（Matsumoto 2020）。形成期末期における北部中央山地の地域間交流は、形成期から地方発展期への過渡期にあたる末期社会の新たな在り方を示す重要な要素であるにもかかわらず、各地方の境界にあたる地域での発掘調査が不足していることや地域別に調査が行われていることにより、十分に研究されていない現状にある。

そこで本発表では、形成期末期にワヌコ盆地と近隣地域で類似した土器スタイルが見られる現象に着目する。これまで地域別に扱われることの多かった各地の調査報告の情報を精査・集成することで、ワヌコ盆地と周辺地域との関係を明らかにする。

2. 研究手法

ワヌコ盆地の形成期末期の土器スタイルは、フニン高原などワヌコ盆地を超えて共有されている（Matsumoto 2020:115）。本発表では、まずワヌコ盆地周辺の発掘調査報告を確認し、末期ワヌコ盆地に類似した特徴を持つ土器（以下末期ワヌコ盆地類似土器とする）の分布状況を調査する。その後、分布が確認された地域の土器について、ワヌコ盆地の土器との類似点や相違点を洗い出し、地域同士を比較する。

ワヌコ盆地の形成期末期に見られる土器スタイルとは、具体的には、Izumi and Shimada (1972)で分類された Sajara-patac Chocolate-brown Decorated と Sajara-

patac Chocolate-brown Plain、Sajara-patac Red、San Blas Red Polished という 4 つの土器タイプを指す。これらの土器スタイルの特徴は、肥厚し内側に切れる口縁の断面形状や、平行な 2 本の刻線で区画された文様帯に圈点文やトンツー文、S 字スタンプ、亀の甲羅 (caparazones de tortuga) と呼ばれるスタンプが施されることである (図 1)。この他にも、文様帯に下向きの三角が刻線で描かれ、その中を埋めるように刻点が刻まれることも特徴的である (図 1)。このような特徴をもとに、ワヌコ盆地周辺の他地域について論文や報告書を確認し、末期ワヌコ盆地類似土器の分布域を調査した。その後、各地の土器とワヌコ盆地の土器の要素を比較し、類似点と相違点を分析した。

3. 分析

ワヌコ盆地周辺の調査報告を調査したところ、末期ワヌコ盆地類似土器についての言及が以下の地域で確認された。ワヌコ盆地の土器との類似についての記述は報告により様々で、報告書内に記述は少ないが図版を確認すると類似が確認できる場合もあれば、報告書内でワヌコ盆地との土器の類似性が指摘されていても実際に図面を確認すると類似しているとは言えない場合もあった。以下では、各地域についてその報告書における記述内容と、実際の比較結果を説明する。各遺跡の位置は、図 3 に示した。

(1) パスコ県

パスコ県では、Chawin Punta 遺跡・Kunturay 遺跡 (Brown 2022)、Huangor 遺跡 (Vera 2012) でワヌコ盆地と類似した土器が確認された。Brown (2022) によれば、Cawin Punta 遺跡と Kunturay 遺跡では、形成期前期から末期まで継続してワヌコ盆地と類似した特徴を持つ土器が出土している。発表者が実際に図面を確認すると、Brown (2022) の記述通り末期ワヌコ盆地の土器との類似が確認できた。一方で、本文中では言及されていなかったワヌコ盆地の土器との差異も見受けられた。Chawin Punta 遺跡と Kunturay 遺跡の土器では、トンツー文は利用されているものの、その配置のバリエーションはワヌコ盆地より少なく単純であり、利用するスタンプや土器の表面色にも大きな違いがある。

次に、同じくパスコ県に位置する Huangor 遺跡では、Vera (2012) が表採調査を行っており、地表には盗掘坑から出土した Kotosh-San Blas の土器が散在していることを指摘している。Vera (2012) による土器の記述を参考にと、末期ワヌコ盆地の土器が持つ特徴はすべて一致している。しかし、Vera (2012) の報告は簡易的なものであり、図面や写真が限られているため、ワヌコ盆地と同様なト

ンツ文のバリエーションなどがあるかどうかは不明である。

(2) フニン県

フニン県では、San Blas 遺跡 (Morales 1977, Saez 2019) と San Juan Pata 遺跡 (Browman 1970, Mallma 1996) でワヌコ盆地と類似した土器が確認された。ワヌコ盆地を扱う研究者によって、形成期末期の San Blas 遺跡との土器の類似は既に多く指摘されているところである (e.g. Izumi and Sono 1963, Matsumoto 2020)。一方で、発表者が Morales (1977) の図版を確認すると、ワヌコ盆地と異なる点も存在することもわかった。当遺跡ではワヌコ盆地で見られる土器のこれらの要素を組み合わせたワヌコ盆地にはない装飾が見られる。土器の表面色には暗褐色から明灰色までばらつきがあった。

フニン県のもう 1 つの遺跡である San Juan Pata 遺跡では、Browman (1970) と Mallma (1996) が表採調査を行なっている。Browman (1970) は San Juan Pata 遺跡において末期ワヌコ盆地を類似した土器を発見し、Cochachongos と名付けている。一方で、発表者が図版を確認したところ、Cochachongos とされた土器タイプの中には末期のワヌコ盆地とは類似しない土器も多いことがわかった。唯一、下向きの三角形と思われる装飾の一部が描かれている胴部の土器片で類似が確認された。

(3) ワヌコ県の東斜面

ワヌコ県の東斜面とは、ワヌコ盆地の東側に広がる雲霧林地帯である。この地域では、Chaupiyacu 遺跡 (金崎他 2022) でワヌコ盆地との関わりが指摘されている。金崎他 (2022) によれば、当遺跡では末期ワヌコ盆地に類似した土器が東斜面や熱帯低地の特徴を持つ土器と共伴している。発表者が図版を確認したところ、出土した土器において、ワヌコ盆地と類似する特徴の全てではないが多くが確認された。土器の表面色は明るい褐色で、胎土はワヌコ盆地と類似する。

(4) ウカヤリ県

ウカヤリ県では、Tutishcainyo 遺跡 (Lathrap 1971) で末期のワヌコ盆地との土器の類似が指摘されている。Lathrap (1971) は、Tutishcainyo 遺跡の Late Shakimu 期の土器がワヌコ盆地の末期の土器と口縁や器形の面で類似すると指摘した。しかし、発表者が図面を確認したところ、確かに類似した器形の浅鉢はワヌコ盆地でも確認されているものの、単純な器形であり明確にワヌコ盆地との関

係を示唆するとは言えないものであった。装飾技法についてはワヌコ盆地との類似は見られなかった。

(5) ラ・リベルタ県

ラ・リベルタ県では、洞窟である Manachaqui 遺跡 (Church 1996) で末期ワヌコ盆地の土器との類似が指摘されている。Church (1996) によれば Manachachi 遺跡の Suitacocha 期に見られる Suitacocha PasteA という土器タイプは、末期ワヌコ盆地の土器に類似する。しかし、発表者が図版を確認したところ、確かに刻点で充填された下向きの三角形の装飾が見られるという共通点はあるものの、ワヌコ盆地では見られない粘土紐の貼り付けが確認できる。また、いくつかの土器は、区画された装飾の内部が彩色されており、部分的に似ているところはあるものの、ワヌコ盆地とは異なる土器伝統を持っていることがわかった。

4. 考察

本章では、上記の分析結果をもとに、形成期末期のワヌコ盆地と類似した特徴を持つ土器の分布域を求めた後、ワヌコ盆地が抱えた地域間関係について考察する。

第3章の分析結果から、形成期末期のワヌコ盆地と類似した特徴を持つ土器は、現在のパスコ県・フニン県・ワヌコ県東斜面に分布することがわかった。ワヌコ盆地と類似する特徴がどの程度あるかは地域により異なり、器形や装飾、表面色を基準にその類似具合を比較すると表1のようになる。ここから、ワヌコ盆地が各地域と築いた交流の実態について考察する。

まず、どの遺跡でも土器の表面色はワヌコ盆地と異なるため、異なる胎土が用いられていると考えられる。そのため、これらの土器はワヌコ盆地から搬入されたのではなく、各遺跡やその付近の現地で製作されたものだと考えられる。

次に、パスコ県とフニン県に位置する遺跡が持つ末期ワヌコ盆地類似土器との共通点の違いを考える。パスコ県の位置する遺跡は、フニン県の San Blas 遺跡よりもワヌコ盆地との直線的な距離が短いにも関わらず、ワヌコ盆地の土器との共通点が少ない。パスコ県の遺跡では、ワヌコ盆地の装飾の種類が少ない一方で、フニン県の San Blas 遺跡ではワヌコ盆地で見られる装飾要素を組み合わせた新たな装飾すら見られる。このことから、パスコ県の土器製作者はワヌコ盆地の土器を自主的に模倣したが、フニン県 San Blas 遺跡では、ワヌコ盆地にルーツを持つなど、同じ土器製作技術を持つ製作者により土器作りが行われたと考えられる。

Saez (2019) によれば、San Blas 遺跡には遺跡内で用途が異なる領域があり、ワヌコ盆地と類似した土器が多く出土した Morales (1977) の調査区は塩水を火にかけて煮詰めることに利用され、ワヌコ盆地と類似した土器の出土が少なかった Saez (2019) の調査区は塩を詰めるための規格化された無文の土器を作るために利用された。よって、San Blas 遺跡において、ワヌコ盆地と類似する土器と塩生産のための土器では土器製作者集団が異なる可能性もある。

また、ワヌコ県東斜面で出土した土器は、ワヌコ盆地と類似した装飾が確認されたものの、亀の甲羅型スタンプなどは見られなかった。また、熱帯低地の特色を持つ土器と共伴している点も興味深い。これらから、ワヌコ県東斜面の土器製作者は、パスコ県の遺跡と同様、ワヌコ盆地の土器を自主的に模倣したと考えられる。

これらより、形成期末期のワヌコ盆地はパスコやフニン、東斜面など多様な地域と交流を持っており、その交流の状況は地域により異なっていたことがわかった。土器製作の面で言えば、フニン県の San Blas 遺跡の土器製作者はワヌコ盆地と土器製作技術を共有しており、特に密接な交流があったことが示唆される。

5. 結論

本発表では、形成期末期にワヌコ盆地と類似した土器が広範に見られる現象に着目することで、ワヌコ盆地が各地と結んだ関係は地域ごとに異なることがわかった。土器の類似の度合いを比較することで、現在のパスコ県とワヌコ県東斜面では、現地の土器製作者によって自主的に要素を選んだ模倣が行われたが、フニン県の遺跡ではワヌコ盆地の土器製作者と土器製作技術を共有する製作者が土器を製作したことが示唆された。土器から得られる情報は限定的であり、本発表で扱ったのは各地の土器製作者間の関わりに限られる。黒曜石や顔料などの情報も合わせることで、今後それぞれの地域社会の関係を論じることができだろう。

出典

加藤泰建、関雄二 編

1998 『文明の想像力：古代アンデスの神殿と社会』角川書店。

金崎由布子、カルロス・ヴィヴィアノ、大谷博則、佐藤優音、ホセ・オノフレ

2022 「ペルー、モンソン川流域第一次調査速報」古代アメリカ学会第 27 回研究大会発表要旨。

Browman, D. L.

- 1970 Early Peruvian peasants: the culture history of a central highlands valley.
PhD dissertation, Harvard University, Cambridge, Massachusetts.

Brown, Nicholas

- 2022 *Ancient Andean Archipelagos: Human Interaction and Social Innovation at Chawin Punta and Kunturay in the East-Central Highlands of Pasco, Peru.*
PhD dissertation, Yale University, New Haven, CT.

Church, W. B.

- 1996 Prehistoric Cultural Development and Interregional Interaction in the Tropical Montane Forests of Peru. PhD dissertation, Yale University, New Haven, CT.

Izumi, Seiichi, and Sono, Toshihiko

- 1963 *Andes 2: Excavations at Kotosh, Peru, 1960.* Kadokawa, Tokyo.

Lathrap, Donald W.

- 1971 The Tropical Forest and the Cultural Context of Chavín. In *Dumbarton Oaks Conference on Chavín, October 26th and 27th, 1968*, edited by Benson, Elizabeth P., pp. 73–100. Dumbarton Oaks, Washington, DC.

Morales, Daniel

- 1977 Investigaciones arqueológicas en Las Salinas de San Blas (Junín) y sus implicancias en el periodo Formativo en la Sierra Central del Peru. Bachelor's thesis, Universidad Nacional de San Marcos, Lima.

Saez, Sergio

- 2019 La ocupación del sitio de San Blas, Óndores - Junín. thesis, Universidad Nacional de San Marcos, Lima.

Vera Roca, Jeffry Jonathan

- 2009 Comentarios arqueológicos sobre las ocupaciones prehispánicas en las cuencas de Paucartambo y Quiparacra – Huachon y la Región de Pasco. In *Ai Apaec: arqueología del Perú*. <http://www.deperu.com/arqueologia/paucartambo.html>

Yuichi, Matsumoto

- 2020 *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru.* The Yale Peabody Museum, New Haven.

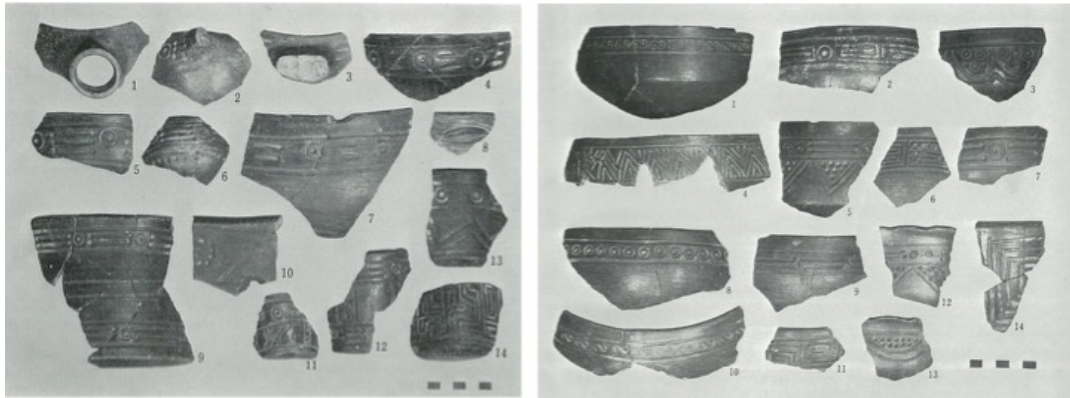


図1 形成期末期のワヌコ盆地に特徴的な土器スタイルの例
(左：Izumi and Terada (1972) Pl.36 a 右：Izumi and Terada (1972) Pl.34 a)

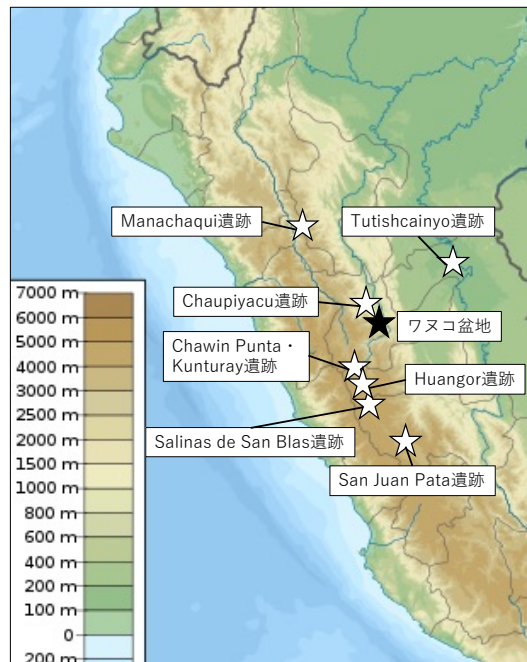


図3 本発表で言及する遺跡

表1

遺跡名	立地	標高	器形	トンツー	下方三角	S字	亀の甲羅	胎土	
Chawin Punta・Kunturay	パスコ	3400m	○	△-	×	×	○	明るい	○：ワヌコ盆地と特徴が一致。
Huangor	パスコ	4300m	?	△-?	○?	○	○	暗い	△+：類似するがワヌコ盆地にはない要素がある。
Salinas de San Blas	フニン	4100m	(M) ○	△+	○	○	○	類似	△-：類似するがワヌコ盆地にはある要素がない。
			(S) ○	△-	△+	○	△+	多様	
San Juan Pata	フニン	3500m	△-	×	○	×	×	?	×
Chaupiyacu	ワヌコ	1000m	○	△-	○	○	×	類似	×：全く一致しない。もしくは存在しない。
Tutishcainyo	ウカヤリ	150m	△-	×	×	×	×	×	
Manachaqui	ラ・リベルタ	3700m	△-	×	○	×	×	×	